

57 録王守仁詩 高杉晋作 一幅 (三の丸尚蔵館)

紙本墨書 九五・七×二八・四
江戸時代 慶応元〜二年(二八六五、六六〇)頃

高杉晋作(二八三九〜六七)が土佐藩の田中光頭(二八四三〜一九三九)に対して、中国・明代の儒者王陽明(守仁、一四七二〜一五二九)の詩を書写して送ったものである。陽明学を創始した王陽明の著作や漢詩は、吉田松陰をはじめ幕末の志士に思想的な影響を与えたとされる。

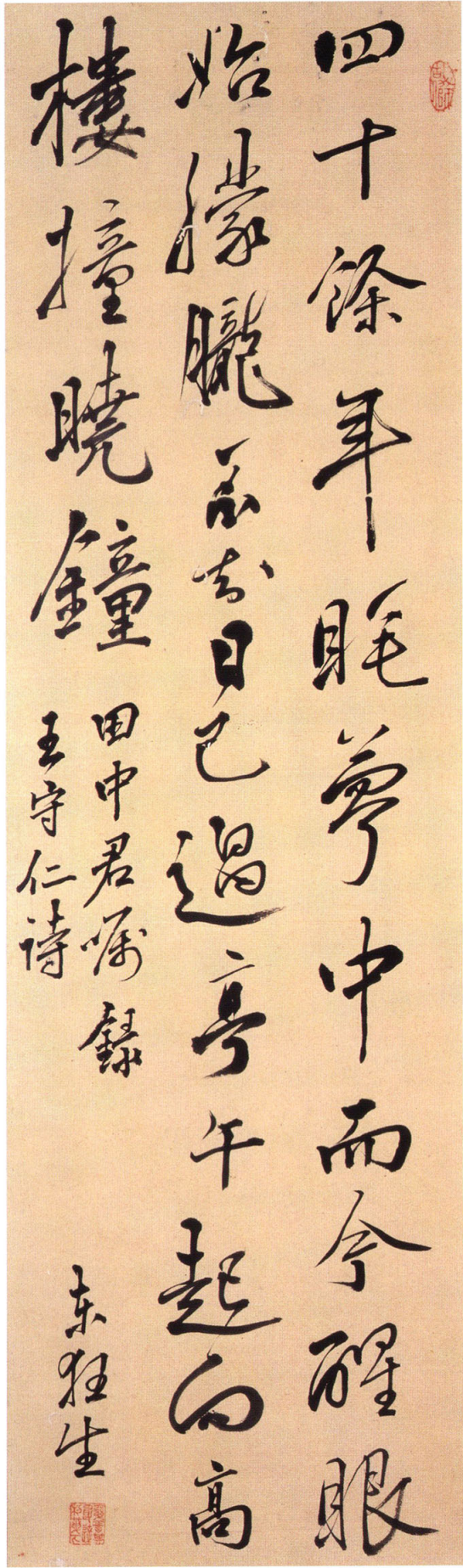
内容は、四十余年をまた瞬く間の夢のうちに過ごし、今ぼんやりと目覚めたが、すでに亭午(正午)を過ぎていて。慌てて高樓に登って、暁の鐘を撞いた、というもの。晋作は田中光頭に対して、「王陽明は亭午に至って暁鐘をついたが、

自分は、夕日に及んでまだ暁鐘がつけない始末だから情けない」と漏らしたという(『維新風雲回顧録』)。晋作と光頭の親密な関係をうかがわせる一齣である。作成時期は慶応元年(二八六五)から同二年にかけて、光頭が晋作の許を頻繁に出入りしていた頃だと推測される。

光頭は晋作からこの詩を送られると、軸装して秘蔵した。しかし、陸援隊に入って国事に奔走していた光頭は、慶応四年に岩倉具視の家臣に預けたところ、維新の動乱の最中で紛失したという。その後、四十余年経って岩倉家から出て来たことから、再び光頭の許へ戻ってきたものである。

なお、付属の箱書には「慶応元年乙丑ノ秋長州下関ニ於テ田中光頭蔵」とある。昭和三年(二九二八)に光頭が皇室へ献上した。

四十余年睡夢中、而今醒眼
始朦朧、不知日已過亭午、起向高樓撞暁鐘、
田中君端錄
王守仁詩
東狂生



- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

書の美、文字の巧

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 74

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

宮内庁書陵部

制作 株式会社 東京美術

翻訳 黒川廣子

発行 宮内庁

平成二十八年九月十七日発行

© 2016, The Museum of the Imperial Collections, Sanmonmaru Shozokan
The Archives and Mausolea Department
Imperial Household Agency